



## 第 51 回健康社会学セミナーの報告

テーマ：基調講演「健康な場づくりのエッセンス 今日からできるヘルスコミュニケーション」  
ワーク「組織健康開発（OHD）モデルを体験してみよう」

講師： 蝦名 玲子 先生

株式会社グローバルヘルスコミュニケーションズ 代表取締役

博士（保健学）・健康社会学者／ヘルスコミュニケーションスペシャリスト

総合司会： 助友 裕子氏 日本女子体育大学スポーツ健康学科准教授

日時： 平成26年12月13日（土）14:00-17:00

会場： 帝京平成大学 池袋キャンパス 本館 501A 教室

平成26年12月13日（土）、帝京平成大学池袋キャンパスにおいて第51回健康社会学セミナーが開催され、講師含む総勢26名（会員12名、非会員14名）の参加者がありました。

健康なまちづくり、職場づくり、学校づくり、家庭づくり……。生活の場を健康にするための取り組みは、settingsアプローチとも呼ばれ、1980年代のオタワ憲章以降、わが国においてもその経験が蓄積されてきたところです。これらの取り組みに共通するのは、健康部門を超えた部門間連携にその成否の鍵があると考えられます。しかし、取り組み主体が健康部門かそれ以外の部門かの違いによって、健康な場づくりのプロセスは異なります。健康社会に関心のある我々がイニシアティブをとろうとする時、どのようなことを心がければより多くのパートナーを束ねることができるのか。本セミナー企画の背景にはそのような問題意識がありました。

本セミナーでは、多様な場づくりのコンサルタント（コンシェルジュ）として豊富なご経験をお持ちの蝦名玲子先生をお招きし、健康な場づくりといった関心事が公的な議題として取り上げられるようにするための戦略として有用なヘルスコミュニケーションの理論に基づいた昨今のエビデンスや実践を学ぶことを目的として開催されました。

まず、第1部の基調講演では、蝦名先生に「健康な場づくりに関心のない人の巻き込み方と継続的な協力体制の構築法」についてお話いただきました。このご講演では、まずヘルスコミュニケーションの基礎に触れ、心に余裕がなかったり健康に関心だったりする人へ保健指導の事例が紹介



され、参加者の心がぐっと引きつけられました。この度のセミナー参加者のおよそ半分は、自治体保健師など住民を対象とした保健事業に携わっている専門職だからです。講義のみならず、そのような特性の参加者へのクイズ形式によって話は進められました。

「マグロとヒラメは、どちらが瞬発力があるか？」

「エボラ出血熱が拡大しているシエラレオネの近隣国家であるギニアでは感染拡大を最小限にすることができた。それはなぜか？」

上の答えは「ヒラメ」です。赤筋（赤身）と白筋（白身）の関係です。漁村

のある自治体保健師が、漁業を営む住民への保健指導で使うという導入の話題でした。下の答えは「宗教指導者を含むクライシス委員会を設置したから」です。政府が一方向的に情報発信するのではなく、誰の言うことなら地域住民が信用し、双方向のコミュニケーションが成り立つのかを考えさせられた発問でした。このようにヘルスリテラシーを高めるうえでのヘルスコミュニケーションの有用性についても納得のいく事例を教えていただきました。



続いて、蝦名先生の名著と言っても過言ではない「困難を乗り越える力」と表現された首尾一貫感覚（SOC；Sense Of Coherence）についてのレクチャーを受け、その後のコーヒブレイクにも花を添えていただきました。

次に、第2部では、引き続き蝦名先生のコーディネートのもと「組織健康開発（OHD）モデルを体験してみよう」と題したワークが行われました。基本的には、座席が隣の参加者同士2名ずつで各課題に取り組みました。

組織健康開発（OHD；Organisational Health Development）とは、個人と組織の能力の相互作用に基づいた社会システムである組織の健康の再生と健康目標の達成に向けた改善のことと定義され、本セミナーの趣旨に非常に適した概念であると感じました。健康な場づくりを進めていくためには、主体となる組織あるいはパートナーとなる組織の組織環境、さらには内部構造をよく見ていかなければならないため、その分析を助けるツールが提供されているようにも見えました。詳細はセミナー配布資料や蝦名先生の著書にそのチェックリストが掲載されていますが、基本的には主体となる組織構造をよく分析することがOHDモデルの根幹をなしているのではないかと思います。ワークでは主に自分の属する組織構造、組織戦略、組織文化がいかにか健康的かを頭をフル回転させて3分間ずつ振り返りましたが、言い方を変えるならば私自身は「身内の部門間連携」を振り返ることの重要性を再確認することができたのではないかと考えております。ヘルスプロモーション分野では、健康を超えた分野間協力（mediate）やパートナー（partner）という表記にもあるように、常に様々な地域組織や庁舎内の他課との連携に関心があつたように思います。しかし、課長の決済がおりないとか、同じ健康推進課でも係が違つると互いの事業がよくわからないとか、今一つ課を超えた庁舎内外の連携にまで至らないジレンマを抱えた職員がいらっしやるのではないかと思います。そのような意味で、自分の所属する組織を足元から見つめなおし、広くパートナーを獲得するための基盤整備を進めることはヘルスプロモーション活動上、有用であると思います。

本セミナーが主眼としていた今日からでもできる健康な場づくりのパートナー獲得作戦について、ヘルスコミュニケーションの理論と実践やOHDモデルから具体的な作業プロセスを学ぶことができました。最後に蝦名先生からは、ご自身の処女作でもある翻訳書『心からのお見舞い（パッチアダムス著）』にある詩をご紹介され、ご講演を締めくくられました。

「君がいて」

君は私の鏡

君の瞳に写っている私を見て私は自分の存在を確認できる  
私は君の中に存在し、私は私自身が存在することを実感できる

組織の一員であっても、基本は人と人との関係ですね。そう考えれば、今日からできることは沢山あるのではないかと参加者一同心から感じ、温かい気持ちでセミナーを終了することができました。講師ならびにコーディネーター役を務めていただきました蝦名先生、および参加者の皆さまに心から感謝申し上げます。

（文責 助友裕子 健康社会学研究会運営委員）

## 出版企画委員会より

諸事情により出版が少し延びることになりそうですが、出版企画委員会でできることは進めていきたいと思っておりますので、執筆者の方々にはなにとぞご了解いただきたくお願い申し上げます。

(出版企画委員会 委員長 杉田秀二郎)

## 事務局からの連絡

### ■ メールによる研究会情報の配信について

メールアドレスをお知らせ頂いている会員の皆様には、10月月例会より、メール配信による告知を行っております。差し支えないようでしたら、まだお知らせ頂いていない会員の皆様もメールアドレスを事務局 (h.morikawa@thu.ac.jp) までご連絡ください。

なおニュースレターは、これまで通り、紙媒体による送付を行っています。  
どうぞよろしくお願いたします。

### ■ 会費3年以上未納について

以下の方(敬称略)は、24、25、26年度の会費が未納です。未納の場合、退会扱いとなりますので、ご注意ください。

伊藤常久 柴田真理子 黒川久美子

### ■ 平成26年度会費納入のお願い

毎年会費の納入についてご協力頂きありがとうございます。今年度会費の納入がまだお済みでない方は、同封の払込票、もしくは銀行振込にて平成26年度会費の納入をお願いいたします。

(既にお振込みいただいている場合、払込票は同封しておりません)

#### 【会費納入先】

郵便振替：00100-8-41025

銀行口座：みずほ銀行広尾支店 普通 1842122

健康社会学研究会 代表 松岡正純

ゆうちょ銀行(金融機関コード：9900)

当座 〇一九店(ゼロイチキュウ店：店番019)

0041025 ケンコウシャカイガクケンキュウカイ

### ■ 平成26年度退会届

平成27年3月31日(火)までにご提出ください。